

フロンドの乱とスカロン

伊 東 広 太

一昨年（一九五四年）の十一月、日本フランス文学会
秋季総会第二日目の十七・八世紀分科会において、桑原
武夫氏から「フロンドの乱が再評価される傾向がある」
という意味の発言があり、小場瀬卓三氏も直ちにそれを
肯定したが、何にしろ会がおわってざわざわと立ち上っ
たさいのことではあり、それ以上の説明を聴くことはで
きなかつた。かねがね革命時の文学者のあらわれかたに
興味をもち、それとスカロンのばあいとを結びつけて考
えていた私に、やはり桑原氏の言葉は耳にのこった。私
は作品オンリーというわけにはいかない。ことにスカロ
ンのばあい彼の生活と切りはなして考えられない多くの
詩を残している。（もつとも、生活と多くかかわりあつた
詩ほど愚作だという特徴をもつてはいるが）

フロンドという混乱をきわめた内乱の渦巻に、彼がど

のように対処し、どのように生きぬいたか、はじめ宮廷
派だった彼がどうして激越なフロンドウールに委つてい
ったか、そのうごぎのなかに、この病詩人の人及び作品
のほんの一面だけでも捉えられれば幸である。

およそフロンドの乱ほど複雑怪奇、いわばわけのわか
らぬ内乱は世界史の上でもまれであろう。これほどてん
でんばらばら、自分勝手を言い張りあつた革命も珍らし
い。この内乱が一七八九年の革命の前ふれだとか、絶対
王権の地がためだとか、封建勢力の崩壊であり金権勢力
の台頭だとか、おかげで個人の自由への保証が認識され
だしたとか、さまざまな教訓を引き出すことは比較的易
しかろう。また、その原因も、三十年戦役の財政破綻が
遠因だとか、クロンウェルの影響だとか、「一人のスペ
イン女と一人のイタリー男がフランスを支配していたか

ら」とか、貴族も僧侶もブルジョアも、誰れもかれも、民衆さえもリシュリュエの「鉄の手」からの解放を望んでいたとか、税金がふえたとか、重くなったとか高等法院のレジスタンスだとか、さては美女と貴公子の恋の演出だとか、——理論づけや、解釈は歴史家にまかせよう。いま、ぼくにとって興味があるのは、この内乱のごたごたした内容そのものである。この内乱には古来さまざまな解剖が企てられたが、それはいぜん、異様な面貌をもつてわれわれの前に立ちはだかっている。

この革命は成功しなかった要素が、そのままその特徴になつていように見える。成功しなかった要素とは統一理念の欠如、一定の終極目的をもたなかったということである。一レーニン、一トロツキーがいて、目的に向つて直進したのではない。ジャック・バンヴィル Jacques Bainville は、この統一理念の欠如がフランスを救つたのだという。それが成功しなかったのは「自己本位の矛盾しあつた一束の利害の寄せ集めであり、しつかりした主義主張を欠いたからである」と、モロアはいう。それがフランスにとつて幸であつたか不幸であつたかはべつとして、そこにはより以上の人間のむきだしのすがたがあつたはずである。相反するいくつかの意志の対立、味方のなかの敵、敵のなかの味方、それによる人間の弱

さみにくさ、それゆえのかなしき、美しさがぼくの興味をひくのである。このゴブラン織の絵模様をいやが上にも彩るものは、ナマズのごときマザランの性格である。

フロンドの乱にはマザランの性格の反映が見られる。この「リシュリュエの遺骸」le reste de Richelieu に「リシュリュエほどの鉄の意志があつたなら、この乱はもつとべつなかたちで、少なくともよりすっきりしたかたちで收拾されていたであらう。美男美女のロマネスクなエピソードだなどといわれる付録は、つかなかつたように思われる。

表題に「フロンドの乱とスカロン」とかいたが、スカロンとフロンドの乱を考えるばあい、むしろマザランなしに考えることはできない。それはまたマザランとスカロンの関係でもある。

周知のごときマザランはリシュリュエの推ばんによつて登場した男である。二十八才でこの鉄血宰相に見出されたイタリー人とは、いったいどんな男であらうか？ ラヴィスを持ち出さなくとも、吝嗇は知れわたつていた。三分の敵、七分の味方ということがあつたが、彼ほど個々の敵を多数に、ようしていた人物もそうざらにはあるまい。またきよほうへんも彼ほどになればむしろ愛嬌といえる。さまざまなマザラン評のなかで、もつともこうけ

いを与えたとされるラ・ロシュフーコオのものをあげてみよう。ラ・ロシュフーコオは「自分が接触した範囲で気づいたこと」とことわりがきして、次のようにいう。「その精神は偉大にして勤勉、すこぶる策に富み、人に取り入ることが巧みであった。その気質は、まるで気質というものを持っていないかのごとく柔軟であった。その使いみちによって自分をいく通りにも使いわけけるすべを心得ていた。彼は恩顧をもとめて来る者の意向をより以上のものに約束してやるように見せかけて、巧みにはぐらかすことができた。また彼はその弱さから、与えるつもりなど毛頭ないものを与えてしもうのであった。遠大な計画をめぐらすときにさえ、その視野はせまかった。不敵な精神と臆病な心をもったリシュリュ枢機卿とは反対に、マザラン枢機卿はその精神よりも心が大胆であった。彼はその野心と吝嗇を、思わせぶりの節度のうごにかくしていた。家族はすべてイタリーにあり、自分は何ものも望まぬと揚言していたが、王後の側近をすべて自分の身うちで固め、彼らに利をほどこすことによって自らの安全と偉大を確保しようとしていた」(La Roche-foucauld, Mémoires)

少しさかのぼってみよう。ルイ十三世は、病み、かつ氣力がおとろえていた。猜疑心のつよい彼はリシュリュ

の人間をきらっていたが、あえてその「遺言」をしりぞけることはできなかった。かくてマザランは登場した。己れの死期を知覚した王は、五才に満たぬ幼王子を抱えて早晚摂政問題の起ることはやむをえぬことと考えていた。摂政は王后か、それとも王弟か？ 王は自分の妻にも、「卑劣なるガストン」にもはげしい不信を抱いていた。ことにシュヴルーズ夫人と連絡をとり、スペインとの通謀を懸念する王の妻への疑念にはぬきがたきものがあった。そこで、王後の摂政が実現したばあい、形式はともあれ、じっさいにその権力を制限する措置が考究された。顧問会議の設置がそれである。顧問会議ル・コンゼイユのメムバフは、Monsieur (王弟) Monsieur le prince (コンデ公) le Cardinal Mazarin, le Chancelier (Séguier), des Noyers, de Chavigny の六人からなるはずであった。

(La Roche-foucauld, Mémoires, 3) 枢機卿は des Noyers の代り ル・ブチエ Bouillier をあげて ル・レゾ Mémoires du Cardinal de Retz, tome I, Charpentier) これには、摂政王后は、顧問会議の同意なしには何こともなしえぬという秘密条項の付録があった。この秘密条項を、メムバアの一人である正義派のデ・ノワイエが王后に密告したのである。王後の驚き、彼女は陰謀の張本人たるマザラン、ド・シャヴィニイに深く期するところがあつたもののごとくである。ところ

が、「王後の良い子となったデ・ノワイエは王の悪い子」となり、失脚してしまった。むろん、マザラン、ド・シヤヴィニイの二人組が、デ・ノワイエは王后と組み、王の「宣言」に反対し、あらゆる権力を彼らの手ににぎろうとしていると、王に信じ込ませたのだ。

マザランはライバルの一人をたおした。つぎに打つ手は王后への工作である。彼は彼に不信を抱く王后との秘密会談に成功し、(この成功が彼の宮廷における将来の位置を決定しようである)かの秘密条項は、王後の摂政宣言(王弟をけとばしての)を王に承認させるためのやむをえぬ措置だったことを、彼女に納得せしめたのである。この外交のベテランは、女にかけてもツボを心得ていたらしく、かくて「夫君の冷淡により、長らく情愛の味を知らぬ……この女ざかりのスペイン女はこの稀なる美男子に会って」(モロア「フランス史」)の推測も生れるのである。

(王后とマザランの秘密結婚を云々する文書は枚挙にいとまがない。ここではそれを断乎否定する者) Madame de Motteville と Henri de Brienne (名をあげるに止めよう。H. Martin, Histoire de France XII)

王は死期の迫りつつあるのを自覚しはじめていた。一方、秘密会談後のマザランは王后に急速に近づきつつあった。「他人の欠点を巧みに利用しつつ」王後のまわりに抜きがたい地歩を築きつつあった。王は一六四三年五

月四日に死んだ。翌日、王后は幼い国王をパリへ連れかえり、その二日後に摂政職が条件なしでなされることを高等法院に要求し、それが入れられた。故王の遺言はそれによって破棄されたのである。その夜、王后はマザラン枢機卿を宰相に任命した。このニュースは彼の反対派を驚かした。宰相となったマザランの第一の仕事は、かつての盟友ド・シヤヴィニイを王后にざん訴し、宣言の罪を彼一人に負わせて、彼を失脚させることにあった。そしてそれは簡単に行われた。かくてスペイン女とイタリー男の支配というフランス史上まれなる事態が確立し、一六四三年、スカロンがブルボン・ラルシャンポオの温泉場から傷心を抱きつつパリに帰ったころには、のちに、

かあちゃんはマザリーヌ

あたいは、マザラン

Maman est Mazarine

Et je suis Mazarin

と落首で唄われるほどのマザラン一家が成立していたのである。

「考えたことをすべて実現した」鉄の意志のひと宰相リシュリュが文学者を保護し、年金を与えたのは、あながち政策的な意味ばかりではなかった。なるほど彼は十

六世紀に文学者が獲得した新たな力を認識してはいた。しかし何よりも彼自身がひとかどの文学者であったことを見逃してはなるまい。彼はへっぴりな詩をかき、コルネーユに匹敵すると思っていた。彼はまた、「Testament politique, Mémoires, Maximes d'Etat」をかいた。(Alfred Rambaud, Histoire de la civilisation française) こういういわゆる文学のわかる政治家に鼻もちならぬ文学者の味方があるものだが、リシュリュのばあいはもっと真実だったようである。彼はソルボンヌを再建し、王立印刷局を設け、のちに博物館となった Le Jardin du roi を創建した。彼が一六三四年、アカデミー・フランセーズ創立の肝入役をつとめたことはあまりにも有名である。マレブが「Ode sur la prise de la Rachelle」を捧げ、バルザックがその Livre du Prince を献じ、ヴォワチュールが「後世二百年ののち、リシュリュによって完成された大事業が語られるだろう」といったことにも、この宰相の意図がうかがわれる。

一六四二年十一月、スカロンは「卑小なるスカロンより偉大なる枢機卿への請願」Requête du petit Scarron au Grand Cardinal をかき、文学に理解ある宰相に送った。この九十二行よりなる詩は、高等法院の舌禍事件に

連座した父のための嘆願書だが、それから四日後(この詩は十一月三十一日に送られ、リシュリュは十二月四日に死んだ。)の枢機卿の死によって、それはその直接の目的を果すことはできなかったが、文学的には意外な反響をよび、これまで閨房をよるこぼすだけで満足してきたスカロンが「文学によって身を立てる」決心をしたのはそのためだといわれる。(Emile Magne, Bibliographie générale des Oeuvres de Scarron)

これに力をえた彼はさらに、「リシュリュよりは組みし易い」と見たルイ十三世にあてて、「赤子スカロン、王に奏議す」Requête au Roy par Scarron fils をかいた。これは王の死(一六四三年四月二十八日)の数日前に聴許され、彼の父は釈放された。彼は己れの文学の偉力を感じたらしいが、それは必ずしも彼の文学の偉力を示すものではなく、死期の迫ったルイ十三世の宥和政策にたまたま合致したと見るべきであろう。(王は死の二週間前に、追放中許可する勅令に署名した。)

この二作は彼の才華を示すにとどまり、詩魂のひらめきをかき、散文を韻文の形式に置きかえたにすぎず、マニユのいう「偉大な成功」はなんによってえられたか知らぬが、少なくともこれによって宮廷との関係がはじまり、

彼の「請願癖」の嚆矢をなしたものとして注目しに価する。一六四三年、マン時代から親交のあったマリ・ド・オートフォール Marie de Hautefort が宮廷に復帰した。むろん、前記宥和政策の一環をなすものだが、かねて機会あるを狙っていたスカロンがこれを見逃すはずがなかった。彼は彼女に「宮廷にかえられるド・オートフォール嬢へのエレジー」Elegie a Mademoiselle de Hautefort revenant a la cour を捧げ、王后への仲介を頼んだ。マリの紹介でルーブルで王后に会った彼は、臆面もなくルーブル内に彼のために一室を設け、「王后の病人」le malade de la reine たらんことをもとめた。王后は微笑をもって答えた。彼はそれを応諾の意味に解したが、ルーブル内の一室の件は入れられず、結局五百エキユの年金(といわれているが、これは賜金的なものであった)をうることに成功した。(A. France, Paul Scarron; E. Magne, Scarron et son milieu)

スカロンは宰相マザランが日に日に抜きがたき地歩を占めつつ、最高の権力の座につくのを見まもっていた。彼は病と疲労に苦しめられながらも苦渋のはてに、「台風」le Typhon をかきあげ、豪華な装いでをこらしてこれをマザランに献じた。むろん、反対給付を予測しての話である。しかしマザランはリッシュュとちがひ、詩

のわかる男ではなかった。この思いちがひに、スカロンのだいいちの悲劇があったようだ。フランス語の短い散文の意味すら理解が困難だったといわれる男に詩を捧げてどうなるというのか？ しかし、マザランが彼の贈物を心よくうけなかったのは、彼から「べつな贈物」を要求されるのを恐れたからだともいわれる。他方、彼は政治で忙しかったろうし、ことごとくに「女王の病人」をふりまわし、「フランスじゅうの病人の総元締」Le doyen des malades de la France をもって任じているこの詩人を、苦々しく思っていたに相違ない。また彼とマリ・ド・オートフォールとのつながりを白い眼で見ているにちがひない。(マニユによれば、スカロンはマザランへの名を出したことが失敗だったと気づいている。)

ともあれ、「台風」タイフオンは黙殺された。スカロンはこの黙殺を軽蔑と見、その悔恨と屈辱と憤怒は、意外にはげしいものがあつた。悔恨と屈辱は散文“A Dame Guillemete”のなかに見られ、憤怒は長詩“Les triplets de la Cour”のなかに見られる。責任はすべて詩人をないがしろにしたマザランに帰され、のちに Les mazarinades となつて突風のごとくあらわれるものが、この時すでにスカロンの胸ふかく蔵されたのである。……

すでにしてマリ・ド・オートフォールは、マザランと王后との關係のただならぬ気配に気づいていた。この才女の眼には、「お追従者の嘘つきの、この異國語をあやつる男と、うつり気な王后」との間柄が墮落とうつつたのだ。リシュリュほどの腕も器量もないくせに、大きな面をしてのさばりかえっているこのイタリー人の女王への影響を、彼女は全力をあげて取りのぞこうとした。マザランから見れば将来のおそるべき敵であった。彼は懐柔策をこころみだが、それも無駄だと知ると、間諜を放って彼女の行動を監視しはじめた。

マリ・ド・オートフォールの失脚は意外にはやくやってきた。「おえら方」les Importantsの徒党に加担したこと、宰相暗殺計画のかどで投獄されたポオフォールduc de Beaufortに味方したことが彼女の失脚をはやめたのである。(レスはポオフォールに宰相暗殺の計画など断じてなかった、と二人の証人 Vaumotin, Ganserville の名をあげて否定する。Mémoires) マリはふたたび宮廷を追われ、フィユ・ド・サントマリの僧院にかくれた。

この保護者の失脚は、スカロンにとってまさに青天のへきれきであった。マニユの言葉をかりれば、「女王の金箱」を閉じることを意味したからである。彼は「精神

と肉体のあらゆる優美さをそなえた」者を迫害する力にかつ驚き、かつ深い憤りをおぼえた。だが彼の現実主義はかいなき悲嘆にくれるより、つぎの打つ手を考えることこそ重要だと判断した。いかにしたならば年金の継続をえられるか？ 彼はからめてからの攻略を思いたち、スウヴレ騎士 Commandeur de Souvry に悲痛な一詩をおくり、訴えた。

「(大意)あゝ、われを哀れに思う世間の同情も、いっぺんの絵空ごとにはすぎぬ。年金へののぞみも、ついに絵空ごとにはすぎぬか？」

Quoi ! toute la compassion

Qu'on témoigna de ma misère

Ne fut donc qu'une illusion

Et l'espoir d'une pension

Rien qu'une chose imaginaire ?

と、いゝ、さびらにひびけ

「わが詩、わが Typhon (台風)、あゝ、考えると泣けてくる。一片のボロ屑ほどの役にもたためではないか。道化詩人という名が、そのすべてのむくいか？ (大意、原文略)」(A. M. le Commandeur de Souvry)

かかる詩を見れば、喰うために詩人となった、とアナートル・フランスにいわれても仕方がなからう。どこに

詩人のほりがあるのか？ 才能の浪費と見るよりほかに考えようがないではないか。彼のこのような行爲は、「乞食行爲」 mendicité 「乞食病人の遍歴」 la pérégrination de malade mendiant として批難されるが、当時の風潮を考慮に入れても、スカロンのばあい、それが度はずれにひどかったようだ。彼の詩の、芸術的香気をかくゆえんのあるものが、やたらと多い「奏議」や「請願」に負うとすれば、この問題はそれだけですまされぬはずである。金をめぐんでくれ、という内容の詩が詩として成立するためには、極度に客観的な、きびしい才能の極限が要求されるであろう。

だがスウヴレは涙を流して、この詩に感動したといわれる。彼のあっせんと、シヨンネル元帥 le maréchal Schomberg (のちのマリ・ド・オートンフォールの良人) のバック・アップもあって、この哀訴は聴かれ、五百エキュの賜金は年金に代えられた。(E. Magne, Scarron et son milieu)

早くから無気味な鳴動をつづけていたフロンドは、一六四八年五月、高等法院の租税法案の登録拒否を楔機に、その特徴のある爆発音をあげはじめた。

スカロンをはじめ、宮廷派に好意的であった。というよりむしろ宮廷派であった。(H. Chardon, Scarron in-

connu ; E. Magne, Scarron et son milieu) 彼の宮廷派は父祖以来の王室にたいする本能的尊敬もあつたろうが、シャルゼ Marquis de Jarzé、コスタール l'abbé Costar、ド・ラヴァルダン司教 l'évêque de Lavardin らの友人の影響も見逃すわけにはいかない。彼はなによりも混乱による国土の荒廃をおそれた。いや、むしろ荒廃による生活の不如意をおそれた。(アナトール・フランスによれば、この内乱によって彼の本が売れなくなるのを恐れた) エピキュリアンで、自由主義者で、いくつかの「吞兵衛の唄」Chanson à boire をかき、「われ、いかばかり居酒屋を愛するやー」"Que j'aime le cabaret;" と叫び、^{キャバレー} 騒亂のさなかに「わしは上等なメロンが喰いたい」と、ふともらず彼である。彼の「パリ攻囲の唄」Chanson sur le blocus de Paris や「リチャエの和議にことせよ」Sur la conférence de Ruell を見れば、肉体的条件をべつにしても、彼がいかに静ひつを愛し、混乱をおそれたかわかる。ことに後者の冒頭の、

フロンドのひとたちよ、
よくもうまく欺したな。

Les frondeurs nous la baillent belle.

は、彼の初期の反フロンド的性格を決定的にするものであつた。目前に迫る飢餓、窮乏への恐怖が、「忠良なる

「臣民」としてよりもいっそう強くフロンドに反撥させたのだ。ただ彼の反撥は公憤にひろがるものがあったにしろ、その根本はあくまでも利己的であり、自我中心的であつた。それが彼の反フロンド的性格を限定し、真に大衆にアッピールする力を失わしめたのである。

一方、彼にはマザランにたいする激烈な反感があつた。「台風」の黙殺、マリ・ド・オートフォールの失脚、修道院要求の失敗、マザランの一般的不人気への共感、ことに王後の約束したものがスムーズに手にはいらぬのはマザランの横槍によるものだと確信が、彼の反感をあまりたてた。しかしそこをふん切つて反マザラン派にまわることは、一挙に年金へのぞみを断つことを意味した。かくてフロンド、マザランのいづれにも不満を蔵しつつ、いづれとも決定しがたき不安定の平衡時代が、しばらくつづいた。矛盾や対立を、つねに易々とふっきつていたスカロンにして珍らしいことである。

すでにちまたには、マザラン攻撃の印刷物がはんらんしはじめていた。アルフレッド・ランボーによれば、おびただしい小冊子が散文、韻文を問わず、今日の大判の書物にして百冊ほども現われたといわれる。これらのパンフレのひとつに、「マザランよ、ありがとう、印刷屋より」というのがあり、パリの半分はその印刷屋であ

るか、印刷物を売つていたといわれる。(Alfred Rambaud, Histoire de la civilisation française) 司教、医者、隠者、修道尼、騎士、代言人、検察官、その書記を問わず、少しばかり筆の立つものはことごとくマザラン攻撃の諷刺詩をかきまくつた。ザレ唄や卑俗な落首がつきつきと現われた。ボン・ヌッフのらんかんはこれら卑猥な文字でうずまつたといわれる。このおびただしいマザランひぼうの文字は、ことごとくビュルレスクのスタイルをおびていた。すなわち、「フロンドがビュルレスクをうばつた」のである。

マザランは例の l'arrêt d'union (Parlement, Chambre des comptes, Cour des aides, Grand conseil の法官たちの集り) を正しく発音できず、d'union (連合の) を d'oignon (玉ねぎの) となまつたがために、

その玉ねぎで泣き面かくな
貴様の齒なんぞ立つてたまるか。

Cet oignon te fera pleurer
Et ne pourras le digérer

とからかわれている。

これらの落首はことごとくビュルレスク的なひびきをもつていた。ビュルレスクの「王」はいわずと知れたスカロンである。彼は内心ほくそ笑むとともに、眉をひそ

めはじめてもいた。ビュルレストの弟子どもが彼に代つてマザラン攻撃をしてくれるのはありがたいが、低俗卑猥な文字が彼の名によって公表されるのが我慢ならなかったのだ。

それに彼はまだ年金への一縷ののぞみをつないでいた。よしんばマザランに疎外されても、王后には悪感情をもたれたくなかった。しかもパンフレタールたちは、王室の権威も、母后の名誉も容赦はしない。王后とマザランへの悪意にみちた卑猥な諷刺詩はつきつきとあらわれ、それは幼いルイ十四世にさえ生涯消すことのできない痛烈な打撃を与えたといわれる。(L. Bertrand, Louis XIV) スカロンは自ら知らぬ間にかかる諷刺詩のかくれたる中心人物にまつりあげられていた。彼は自らの名声を濫用する卑怯者たちへの抗議として、「他人の名をかたり誹毀文書をはんふする者への百四詩」Cent quatre vers contre ceux qui font passer leurs ibelles diffratoires sous le nom d'autrui を公けにしたが、津浪のように印刷所から送り出される印刷物はどうしようもなかった。一六四九年三月、「リュエエの和議」が成立し、王室はパリに帰った。混乱のほどぼりのさめるをまち、彼は年金の支払を要求した。(Rogatum à messieurs Tubert, Lionne et Bertillac) だが、この三人の出納官はもち

ろん、誰れひとりとしてこの要求をまじめにうけとる者はなかった。さらばと彼は、「こった牛乳のような白い手」のアンヌ・ドートリッシュュにあてて「女王へ」
A la Reine ならびに「女王への感謝」Remercement a la Reine をかき、訴えたが、すべては無駄であった。彼はその背後の邪魔者がマザランであることを信じてうたがわなかった。マザランもまた、せんだうの中心人物はスカロンであると確信するにいたった。

そのころ、スカロンはマンの聖職録を失いかける危機にみまわれた。マンの新司教、エマニユエル・ド・ラヴァルダンが余分の聖職録を自らの取巻ぎに分配したうえ、スカロンのものをもそれにつけ加えたからである。驚き、かつふんげきした彼は、司教に痛烈な抗議文 (A mon seigneur l'Évêque du Mans) を送り、ついにそれを取返した。一息ついた彼は、年金の喪失を、文学の収入によって補おうとし、「滑稽詞華集」Le Recueil de quelques vers burlesques の再版や「変装のヴィルジル」Virgile travesty の上梓により、かろうじて生活を支えることができた。彼はさらに、以前評判のよかった戯曲にふたたび手をそめた。彼の新作戯曲「可笑しな相續人」Heritier ridicule は一六四九年の中頃、オテル・ド・ブルゴニユ劇団によって上演されたが、不幸、内亂のために中

止をよぎなくされた。彼はそれをもマザランの責任に帰し、「直接間接の不幸の原因はあげてマザランにある」となし、彼へのうらみは抜きがたいものとなった。

そこに女性の影響がハッキリ認められる、とマニユはいう。スカロンは青年時代、セレスト・ド・パレエジー *Céleste de Palaiseau* を知り、彼女を誘惑し、のちにそれをすてた。セレストは「誘惑者」から四万リヴルの慰料をもらい、一時修道院にかくれたが、金を使い果たし、ふたたびスカロンをたよって来た。彼女はすでにうば楼であったが、(しかし、マニユによれば、作家 *Scudery* を夢中にさせるほどの色香を保っていた) なかなか利口な女で、スカロンの周囲から「悪い仲間」をとりわけ「彼を喰い者にし、ときには必要なものまでもうばってゆく居候ども」を追ひ払った。その居候どものうちでも、もっとも仕末におえない者は、「ひとり酒好き、ひとり男好き」のスカロンの姉たちであった。セレストは弟を喰いものにするこの姉たちをのがれ、彼をうながし、フォブール・サン・ミシエルの「トロア館」 *Hôtel de Troyes* にうつり住んだ。この建物の位置こそ、スカロンのフロンドゥールとしての位置を決定的にするものである。目と鼻のリュクサンブールには *Gaston d'Orléans* が住んでいた。まわりの修道院には名だ

たる隠謀家たちがかくれ、時をうかがい、秘策をねっていた。ガストン・ドレルアンと打合せのためにやって来た *Paul de Gondi* (ノス枢機卿) が、彼と連れだつてスカロンを訪問した。ブエイ・セルタン *Puits-Certain* の印刷所が近くにあり、そこで印刷された誹謗文書をフロンドゥールはトロア館附でうけとっていた。コンデ公の使者がガストン・ドレルアンのそれと打合せのために、詩人の部屋を利用することもしばしばであった。セレストの扶養、ことに新住居の費用は、その訪問者の激増とともに少なからぬものがあつた。彼は以前にもまして年金の喪失を残念に思い、その原因となつた(彼によれば)マザランをうらんだ。彼は激流に立つ思いで痛烈無比な「マザリナド」の出現を予告する。「……不幸、不幸、不幸、いまに病人の苦しみが爆發するぞ、それもエルゼヴィル版の美装をこらして(大意)」(*A monsieur d'Aunale d'Haucourt*)

諷刺作家やパンフレットを動員してマザラン攻撃の機会をねらっていたポール・ド・ゴンディがそれを見逃すはずがなかった。彼はスカロンをたきつけ、むしろ彼に強請して、「宮廷に関する八行詩」 *Les triquets de la cour* をかかした。このいわゆる腐蝕性の詩のなかで(この詩はマリニイ *Marigny* 等との合作によるものと

いわれるが、モーリス・コッシン Maurice Cauchie 等の研究により、スカロンのかいた部分がほとんど明瞭である。スカロンは現代の混乱をあげてマザランの責任に帰し、ただはおかぬぞと脅迫する。心の間げきをついた、レスの巧みな誘惑に抗すべくもなかったのだ。アンリ・ダールメラ Henri d'Améras はいう。「レスはスカロンの、なかに一個の道具を見たにすぎず、彼を巧みに利用しようとしたのだ。(中略) 利用してからすててしまった」(Le Roman Comique de Scarron)

「この不明の詩人」は、もはやフロンドたるをかくしはしなかった。マザランへの反感と年金へののぞみのあいだに辛うじて安定を保っていた精神の均衡がやぶれたのだ。かくて「彼の部屋は高等法院の回廊とひとしく、陰謀の策源地」となったのである。ラベ・ド・ラ・リヴイエール l'abbé de La Rivière、ド・フィスク伯 Comte de Fisque、ラベ・ド・フランネット l'abbé de Franquetot、スグレエ Segrais 等が情報をもちより、熱烈な議論をたたかわし、来るべき民衆動員について計画した。マリイがその苛烈なバラドを誦し、プロットがそのしんらつな八行詩をよみあげた。(Scarron et son milieu) レスはスカロンの筐底に「フロンドワールの士気を鼓舞するような」誹毀文書が眠っていることを知っていた。

レスは詩人をしそ、該文書をブラッセルの印刷所に送る決意をさせた。かくて一六五一年のはじめには、ポール・モリヨ Paul Morillot の考証により、「スカロンのものということを拒絶することの困難な」、かす限りないパンフレのなかでも最も激越な誹毀文書が流布されはじめたのである。

マザランはパリじゅうのきらわれ者であった。その持つ柔軟性すら、軽蔑的であった。だがそこには群集心理が、附和雷同性が支配していたこともじじつである。外国人の支配という感情に、ナシヨナリズムが結びついていた。フランス合理主義が集団のかたちを取ったばあいの危機が、これほど露骨に示されたじきもまれであったろう。——レスの尻押しでこの激流にまき込まれたスカロンの攻撃には、この一般的特質のほかにひとときわきわだつ恐るべき毒をふくんできた。彼はコロナ枢機卿 Cardinal Colonna の秘書であったころのマザランの情事をあばき出した。

Ton incroyable destinée
Par ce très sortable hyménée,
De toi, Prince des maquignons,
Avec la vendeuse d'oignon,
Eût été bornée à l'Espagne.

ワレ鍋に閉じぶたの、馬喰の親方と、玉葱売りの女との結合——マザランの相手というのは、アルカラの八百屋の女だったのである。

マニユによれば、「男に生れて女になった」といわれるマザランの恥部は有名であった。だがその真実を証明する何ものもない。スカロンはこの不確実なものへも攻撃を加えることを忘れはしない。

「哀れなジュール（マザランのこと）よ、キン玉もろともお前の首をちよん切るぞ。毛をむしられ、キンをぬかれた枢機卿よ、男でも女でもなくなつて、のめのめロロへ帰れるか？……」

こういう情事をあばかれることは、王后の手前、少なくともマザランはやり切れなかつたに相違ない。が、弁解がましいことをいわなかつたところに、マザランの賢明さがある。

スカロンはさらに、「マザラン、この無知なるもの」と呼びかけ、戦争誘発と継続の政治責任を追求する。ランスの戦いの後始末、ポオフォールの投獄、バリヨンの暗殺、アンヌ・ドートリッシュの誘惑、高等法院の迫害、リシヨオ、カノル等の絞首刑、王権の衰微、全フランスが恐ろしき窮乏にあえぎつつあるというのに、「手のとどくものは何んでもうばつてしまひ」「金をシシリ

島へかくしてしまつた」者への攻撃は、しつようにつづけられた。あらゆる不幸——己れの不幸、国家の不幸——の原因はマザランである。マニユの引用しているものを借りよう。「ソドムのムチを振うこの執達吏」はその罪、その聖物売買の罪を高く支払わねばならぬ、として、

「カボチャ頭の宰相、人非人、叛逆罪でお前はハリツケだ。グレエヴの刑場では、お前のバタつく足を、絞首台ががっちりうけとめてくれるだろう。お前の腐肉は、空の鳥も喰えはしない。……」

「マザリナド」の反響は大きかつた。彼はこれで「台風」以来の重なるうらみを、晴らしたつもりだつたかも知れない。だがそれに払わされた代価も大きかつた。味方の喝采を博したが、敵側のはげしいうらみを買つたからである。全「マザリナド」の責任を、一身に背負込む破目にたちいたつたのだ。アンリ・シャルドンはそれをコルネーユ攻撃の若き日の彼の詩とともに、スカロンの犯した二大罪悪のひとつにかぞえている。(Sarron, *Incennu*)シャルドンによれば、スカロンが「百四詩」をかき、有名な「ジュール、あなつたはかつて不当な諷詩の対象であつた」「*Jules autrefois l'objet de l'injuste satire……*」にはじまる「枢機卿へのソネ」*Sonnet au*

Cardinal をかいたのは、自らの行きすぎを後悔したためだったという。果してそればかりであつたらうか？

「百四詩」は、純粹にならうとするときの、芸術家のごく当り前な身振りではなからうか？ 「枢機卿へのソネ」は、それによって宮廷とのよりをもどし、あわよくば年金の復活をねらつた病詩人一流の商魂？ のあらわれではなからうか。シャルドンのごとく考えれば、混乱に動揺する人間スカロンがうかがわれ、後者のごとく考えれば、自ら「金には貪欲」Avide d'or といった終始一貫、不屈なスカロンがあらわれて面白い。

ともあれスカロンは、これによって猛反撃を喰らつた。「マザリニスト」の反撃は当然とするも、彼の名声をねたみ、その作品が「風よりも早く」売れるのをねたむやからが、彼がマザランに加えた以上の人身攻撃を、彼に加えてきた。天に向つて吐き散らしたものが、自らの顔にかえてきたのである。「パリが埋もれていたいまわしい汚物の堆積を掘りかえした」(Response au sire Scaron sur le sujet de ses cent quatre vers qu'il a fait imprimer) 「悔悟を知らぬこの文士が、ナワつきでグレエウ(刑場)へ現われるのを見た」(Response au Parlement burlesque de Pontoise) 者が、あらわれた。しかし、それらは雑兵であつた。思ひかけぬ伏兵は、「日

月両世界旅行」の作者の出現であつた。「敵に廻ることは死を意味した」強敵シラノの正面切つての登場は、スカロンの対マザラン闘争に、ほとんど終止符を打つてせまるものであつた。

はじめはフロンドウールで、ボン・ヌッフの集会にもその奇怪な面貌を現わしたといわれるシラノがなにゆゑに王党派に寝返りをうつたのか。「マザリナド」の先駆をなす「焼ごげ国家の宰相」le Ministre d'Etat flambe をかいた彼ではないか。またダスウシイの友人として、スカロンに悪意を抱くものではなかつた。マニユのいうように、「この気みじかな決闘家は自らの卑怯な攻撃ぶりを後悔し、一転してマザラン党になつた」のであろうか？ それならばコンデやロングヴィルの二股管葉の徒輩と何んのえらぶところもない。アナトール・フランスはサン・タマンの「Triolets」(サン・タマン詩集をしらなを發見でき)を彼がスカロンのもつと誤解したからだとなかつた。いづれが、果してそれだけであらうか？ もしそうとすれば、いざり(鱧)のスカロンが「トルコ人のように強くなるために、多くを与えたであらう」(そうすれば決闘でたおせる)ベルジュラックの矢つぎ早な攻撃の火の手を徒らにこやしゅうぼうかん(拱手傍觀)していたサン・タ

マンは卑怯者となる。また、この危険な攻撃を胸いっぱい
にうけ、一片の弁解も試みなかったスカロンの面貌は
英雄的に見えてくる。だがこれはフランスの説を真実と
見た上での仮説で、ベルジュラックの寝返りには、マザ
ランの政策を見極めた上での、もっと深い根底があった
ような気がする。ただその攻撃ぶりは、スカロンがマザ
ランに試みたと同様、個人攻撃、人身攻撃の域を出で
ず、いわばフロンド的でも名づくべき性質のものであ
った。

シラノはスカロンの作品を、「ろばの皮と、かあちゃ
ん鵝鳥の物語のごたまぜ」(おとぎ噺)ときめつけ、スカ
ロンの病気を、(男の病気)と断定する。

「てんぼでだるまの彼を見れば——もしその舌さえ動
かなければ、死廟の境内にたてられた(胸像)と思うだ
ろう……(略)近頃彼の友の一人が私にハッキリこう言っ
た。彼のねじけた腕が腰骨に化石のように、へばりつ
いているのをつくづく眺めて、悪魔が魂をかけた首吊台
と思った、と……」

王権を犯す者がいかなる罰をうけるかを、彼はスカロ
ンの肉体をかりて示そうとする。

「暴民よ、来たりて神の正しきさばきを見よ！ 恩知
らず、裏切り者のいかなる地獄の責苦をうけるかを。恐

ろしきスカロンの肉体こそ、よき見せしめだ。……(略)
毎日、手足のどれかが腐り死んでゆく。最後にのこるも
のは舌だけだ、その苦しみのいかなるものかを叫び知ら
せるために。……」(Consulter scarron et son milieu)

この挑戦に、スカロンは沈黙をまもった。見当ちがい
の挑戦に応ずる必要がないと思ったのか。それとも直接
行動とはいかなくとも、シラノの「ロンスカールへの手紙」
Letres contre Ronscar のごとき致命的な返答をうけ
とることを恐れたのか。マニエは *Don Japhet d'Armé-
nie* のなかの (*de Bergerac, de cyrano, de Bergerac-Cyra-
no, de Cyrano-Bergerac, de Cyrano de Bergerac*) をス
カロンの唯一の回答とうけとらなければ、他にそれらし
きものは見当らぬという。シラノの呼称を五通りに分け
ることによって彼の分裂症を諷刺したつもりなのか？
ともあれ、スカロンはその無益なたたかいつかれてき
た。ふと気づいたときにはあまりにも深入りしていた。
フロンドというゆくえ定めぬ渦巻のなかに、果かないあ
がきをつづける自己のすがたに気づいたのだ。さいごま
でのぞみをつないだ宮廷とのつなも切れた。かつての盟
友レスからもすてられた。この混乱のなかに、自己を傷
つけ、他人を傷つけ、しかもえたものは何んであったら
う。凶太く、息切れを知らぬ宰相マザランの前で終始裸

踊りをやらされた自己の役割に気づいたとき、この自称楽道家もかぎりなき孤独の味をかみしめたに相違ない。

フロンドが失敗し、一六五三年二月マザランはパリに帰った。スカロンはマザランの復讐をおそれた。じじつマザランが「若干の人々を罰せねばならぬ。……誹謗文書により民衆を反抗にかりたてたへ、ほ、文士の断罪を忘れてはならぬ」といい、マリニイその他の名をあげたとき、スカロンはパリ追放くらい覚悟していたであろう。彼がアメリカ行を断念したのもなかなかトウレーヌから帰らなかったのは、むしろマザランの追求を怖れたからである。だがマザランのスカロンにたいする態度はいがいに寛大であった。いまさらいざりの詩人の罪を問うても仕方がないと思つたにちがいない。憐みというより軽蔑から彼を追放のリストからはずしたのだ。

その後のスカロンはもみ手をしながら、取消の唄をうたいはじめた。「……ともあれ、陛下ならびに閣下に礼を欠くほど恩知らずの愚か者であったにしろ、神にたいしてなしうるものも、陛下ならびに閣下になすべきではなかったと、心から後悔しています」

思えばクロンウェル革命におけるシルトンは幸福であつた。

フロンドの舞台における勝敗はきまつた。だが彼の文

学の勝敗は——彼の文学がそれによってプラスになったかマイナスになったかの研究は（じじつはそれがいちばん重要なのだが）、なおここに残されている。

参考文献

- E. Magne, *Bibliographie générale des oeuvres de Scarron* (Paris, Leclerc, 1924)
- Henri Chardon, *Scarron inconnu et les types des personnages du Roman comique*, (Paris, Champion, 1904)
- E. Magne, *Scarron et son milieu*, (Paris, Emile-Paul frères, 1924)
- Henri d'Almeras, *Le Roman comique de Scarron*, (Paris, Société Française d'Éditions Littéraires et Techniques, 1931)
- Léonce Curnier, *Le cardinal de Retz et son temps*, (Paris, Amyot, 1858)
- *Mémoires du Cardinal de Retz*, (Paris, Charpentier, 1891)
- La Rochefoucauld, *Mémoires*, Bossard, 1925)
- Henri Martin, *Histoire de la France tome XI et XII*, (Paris, Furne,)
- J. Bainville, *Histoire de la France*, (Paris, Arthème Fayard, 1954)
- Alfred Rambaud, *Histoire de la civilisation française*

- (Paris, Armand Colin, 1888)
- | L. Bertrand, Louis XIV, (Paris Plon, 1924)
 - | Oeuvres de Paul Scarron avec notice par A. France, (Paris, Alphonse Lemerre, 1880)
 - | Le Roman Comique avec notice par N. David, (Paris, Bibliothèque Nationale, 1882)
 - | P. Scarron, Poésies diverses avec notes et variantes par Maurice Cauchie, Tome I (Paris, Marcel Didier, 1947)